
能く在る輪廻と猫の囁

さようなら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

能く在る輪廻と猫の囁

【Nコード】

N0756S

【作者名】

さようなら

【あらすじ】

そこに黒猫が手招きしていたのです。

(前書き)

これは私の個人的な解釈であり、原作を誹謗中傷する意図はございません。

文明開化も華やかな時代。

その時代にあった噺で御座います。

華やかな大通り。そこで私は歩いていたのです。

そこでふと道端を見やると、なんと蝙蝠傘が捨てられているではないですか！

途端に勿体無いという気持ちが湧き上がってきました、その傘のものとへ近づいたのです。

「ちよいと道往く其処の御嬢さん、御出で、此処らで一つ話ましよう」

「？」

誰が話しかけたのでしょうか。しかし誰も私に話しかけてはいないようです？

嗚呼！なんてことでしょう！その捨てられた蝙蝠傘の下、草臥れた尻尾を上げて毛繕っている黒猫がいたのです。その猫が人語を喋ったのです。

猫は賢いから人語を解するとは言いますが、嗚呼この猫は自ら人語を喋っているのです。

こんな噺、誰が信じてくれましょう。まさか猫が喋ったなんて！

「御嬢さん？御出で。」

しかし好奇心というものがありまして、それに私は負けてしまいま

した。

まさか御伽噺のように食べられてしまうかもしれませんけれど。

「今日の噺は、そうだ昔に路端で聞いた愉快な悲恋など」

「昔交わらざる身の上の淡い恋に溺れた鳥と兎が居ました」

「叶わない夢なのでしょう？オキノドクサマ」

「いいえ、冷たい旅路の果てに二匹身体を捨てて結ばれたのです」

「なんだか可笑しな噺ね」

そこで私はクスクス笑いました。

可笑しな噺だけれども面白い、いや可笑しいから面白いのですわね。

「ねえ猫さん、貴方は何で……」

気がつきますと、猫はおりました。

猫が煙のように姿を消してしまったのです。

はて、今まで私はどうしていたのでしょうか。

まあ、しょうがないですわね。まひるのゆめとでも思いましょう。

またいつかのように道を歩いていると、またもや黒猫が手を招いておりました。

「此れは何時かの可愛い御嬢さん、今日のも一つ噺聴かせましょう」

「……そして番を離れた揚羽は曾て愛した雄を喰い荒らしました」

「どうやら有り触れた寓話のようね、オアイニクサマ」

「いいえ、痛快なる喜劇には惨たらしい落ちが付き物なのです」

「なんだか報われない噺ね」

この猫さんたら、この前は可笑しな噺、今回は報われない噺。話題には困らないのかしら。

そして噺が終わるとやはり猫は姿形なく消えていました。

「やあや、またまた逢った。御嬢さん、今日は最後に一つ聴かせましょう」

「今度は何の噺？」

「御存知だろうか百回生きたお喋り猫の噺」

そこで思わず笑ってしまいました。だってそれは……………

「貴方のことでしょうか？」

「時に歓天喜地の夜も又は老少不定、異域之鬼の代も」

「成程話題には欠かないようね、ゴシユウシヨウサマ」

と、振り返りますと、猫はおらず、雨傘だけが残されておりました。

「なんだか不可思議な嘸ね、——嗚呼」

私は晒いながら言います。

「今宵は雨かしら」

嗚呼面白い話だった。さてこの経験どうすればよいものかしら。子供のように、御伽嘸にでもしてみましようか。

何処からか、猫の啼き声が響きます。

その声は、私の——

能く在る輪廻と猫の嘸 歌詞

華やかな大通りの 棄てられた蝙蝠傘の下

草臥れた尻尾上げて 毛繕う黒猫在りました

「ちよいと道往く其処の御嬢さん、御出で此処らで一つ話しましょう」

猫は云う「今日の嘸は、そうだ昔に路端で聞いた愉快な悲恋など」

「昔交わらざる身の上の淡い恋に溺れた烏と兎が居ました」

「叶わない夢なのでしょう？ オキノドクサマ」

「いいえ、冷たい旅路の果てに二匹身体を捨てて結ばれたのです」

「なんだか可笑しな嘸ね」

薄芽吹く街路樹を 眺め見るハイカラ服の横

草臥れた尻尾振って 手を招く黒猫在りました

「此れは何時かの可愛い御嬢さん、今日のも一つ嘸聴かせましょう」

猫は云う「そうだな今日は、ええと 嫉妬の炎に舞った醜い蝶の嘸」

「そして番を離れた揚羽は曾て愛した雄を喰い荒らしました」

「どうやら有り触れた寓話のようね、オアイニクサマ」

「いいえ、痛快なる喜劇には惨たらしい落ちが付き物なのです」

「なんだか報われない嘸ね」

「やあや、またまた逢った。御嬢さん、今日は最後に一つ聴かせましょう」

猫は問う、囁れた声で「御存知だろうか百回生きたお喋り猫の嘸」

「時に歓天喜地の夜も又は老少不定、異域之鬼の代も」

「成程話題には欠かないようね、ゴシユウショウサマ」

振り返る先に猫は無く 街の風に揺れる雨傘カラカラ

「なんだか不可思議な嘸ね、――嗚呼」

娘は呟う「今宵は雨かしら」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0756s/>

能く在る輪廻と猫の囁

2011年10月8日10時19分発行